シベリア抑留の話（62・7・18）

河野　卓男（S15文乙）

今、ご紹介にありました様に私、大学を出まして、日本興業銀行へ入り船の貸し付けの方へ回されましてね、ちょっと特異な仕事をしておりました。これは今日のお話の前置きとして、申し上げるわけですけども、戦争中に日本の船舶が全部徴用されましてね。そしてこれが撃沈されますと、全損保証金として政府の再保障の保険金が入ります。この金が陸へ逃げない様に、代船建造まであくまでプールする。そうしないと船を造る者がおらん様になる。というんで特殊なプール預金制度というのがございまして、それの私は代理受領の仕事や事後処理の仕事を専従要員としてやらされとったわけであります。これは言うならば、陸軍にとっては、あるいは海軍にとっては、秘密事項でございますので、銀行内部でも全部暗号でもって本社へ入って来る、それを私が集計してですね。いろいろとそういう金の受け渡しの事なんかも、代理業務の事なんかもやらされていた。当時の金で一番多い時に、私が銀行を辞める頃に、約三億円余りでございましたで

しょうか。今の金額にすると相当のものでございます。日本の保有船舶が当初約八百五十万トン位でございました。そうしてですね、どんどん沈んでゆく。それから建造の能力がどんどんカーブが落ちてゆくという状況でした。ちょうど十七年の十月から興銀に勤めまして、約二年半程勤めたわけですけれども、その仕事をずっと秘密要員としてやっておりました。ところが新たに軍需会社法というのが出来ましたのを契機として、軍需企業に対する興銀の事業審査権が全部剝奪され、命令融資とだまって貸したらよろしいという様な事になりましたので、興銀の業務が形骸化されてしまいました。それで見切りをつけて私、軍需省の方へまわったわけですけども、いずれにしましても、そのやめる直前にですね、ちょうど昭和十九年の三月でございますね、軍需省へ移るわけです。

その前に私の起案した一船五万円以下を自由にして払い戻し、零細船主の負担を開放する事と、未然に反戦ムードの防止を目的とした意見書を興銀から海運総局長官にあてて出して頂いたのを最後として、私は興銀を去ったという経緯がございます。その時のカーブを見てますとですね、ちょうど昭和十八年の暮、秋頃からぐんぐん沈むわけですね。即ちアメリカの潜水艦の活動がもう日本列島の周囲にくまなくはりついてしまう。そうして船が出来た。それが造船所から任務地に向う途中でボーンとやられるわけです。海上保険証券は権利の化体物ですから本券作成前に沈むと船主の権利に空白がおきますので、政府と相談して副証券（仮証券）制度でこの空白を埋め

るという便法をつくったり、そんな事もございましたが、一番重要なことは、その撃沈屯数と建造屯数と現有屯数を過去から現在まで、カーブを画いてグラフにしてみたのが、十九年の初めでした。そうすると昭和二十一年の二月には屯数がゼロになる計算が出て来ました。これは厳秘事項ですが、私は少なくとも船がゼロになるという事は、これは終戦だと敗戦だという事で、敗戦を大体昭和二十一年の二月迄と概定しておりました。

ところが、それがご承知の様にですね、原爆の出現で半年早まったとみてよいんじゃなかろうかと思っております。十九年の五月に教育召集を受けまして、伏見の中部三七部隊へ入るわけですが、そこで約二、三か月の間、はだしで所謂ガス兵要員とか、何とかいう名目でガスマスクをつけて鉄砲をかついで練兵場を走りまわされていたんですけども、その頃伏見の兵舎からつぎつぎに南方へ出て行きます。やっぱり服装でわかりますからね、南へ出て行く。行く所は、ほとんど沖縄の方向ですから、こりゃやばいなと思って見とったらですね、たまたま七月でございました。いよいよ私の所属する機関銃一個大隊が編成されまして、そこで支給された服装を見て北へ行く事になった事を知り、その時点でこれで助かったなあと思いましたね。恐らくその頃沖縄へ出た人全部死んだでしょうね。さて私は召集される前にすでに軍需省へ転職しております。ですから召集と同時に上司の軍需管理局長官名で特殊要員である私の召集解除請求が、伏見の師団長に出されました。そしたらそれが裏目になりましてね、こんな非常時に返せとは何ごとじゃちゅ

うわけで、あいつをすぐ玉砕要員でほり出せって、私、師団長命令で特に編成されたという部隊の一員となる栄に浴したわけですね。そんなことで八月、エトロフに行ったわけですけれども、ご承知の様に、その前にアッツ、キスカで玉砕をした時に兵士の出身が一定地区に集中して編成された連隊で、そういうのが全滅したわけです。山崎部隊は北陸一地区に集中した出身兵士ですね。あるいは仙台、そうするとその土地の人がほとんど死んでゆくわけでしょう。そういう事で非常にそれが銃後の不安感を増大します。これじゃいかんなということで危険分散策がとられていたのです。

所謂、本土決戦作戦の尖兵としてエトロフを防衛するという時の新しい増強部隊はですね、全国に割り当てる。即ち各師団に一個大隊ずつ供出と、こういう形をとっとります。そして私は京都の師団中心に、大阪なんかも入っとりましたが、一つの大隊を編成する中へ入れられました。そしてエトロフへ行ったのが昭和十九年の八月で、二十三日に上陸しとります。エトロフへの航海中に現在有名になっとりますエリモ岬に濃霧待避のため、あの辺、潜水艦がウロウロしてますからね、やばいちゅうんで、あすこで二日間待機しておって、それから、国後島との海峡を渡ってエトロフのかつて連合艦隊が、集結しておった単冠湾ってのありますね、そこへ上げられた。そしてそこに約一年間はいわゆる敵が上陸するという事を想定した場合の為の機関銃座を水際地区で作るわけですよ。ところが半年程すると、それはもう意味ないというんで今度はですね、敵

をあげて持久戦で戦うんだというんで、いわゆる山岳地帯の方へ皆、食糧から何から全部上げましてね、そこに今度は所謂トンネルを掘ったり、その山岳地に食糧の移動、約二か年半分持ってましたね、食糧をですよ。そしてエトロフというのは、千島列島全部で約十万の兵、その中で約五万は、あそこに集結しておったわけです。だから所謂北方第五方面軍の所管でしたが、その所管の樋口中将司令官は旭川なんですが、所謂現地司令部はエトロフの単冠に位置するという非常に重要な場所として位置づけておった様でございます。まあそんなことで、私は実際の戦況がわかっていましたから、幹部候補生を盛んに受けろ受けろと云われましたけれども、京都の時もことわったし、それから現地へ行ってもですね、幹部候補生受けろと大部云われましたがイランと。私は肺病やった事があるからアカンのやと云うて逃げ廻って、ここにまあおるのが一番確率としては、危なくないだろうという様な、いずれこの戦さは早晩負けるという様なことでですねおったわけですが、そのことが裏目に出たと云やあ出たんでしょうね、いずれにしましても、二十年の八月、エトロフ島で終戦を聞きました。

私、直観的にその時感じた事は丁度、我々が大学の時に田岡先生という戦時国際法の権威ある学者の講義を聞いておりまして、非常に強く印象に残っとるんですが、戦時占領と保障占領の差違。だからまさしくですね、終戦の時エトロフはソ連軍もだれも来ておりませんからね、まだ、日本の内地と同じで保障占領下にあると、だからその地区の者は捕虜になるはずがないという、

ちょっと安心感があった。ただし、一方での不安はですね、ところがハーグの捕虜扱い規定の条項だけは、日本は削除して戦時国際のですね、国際条約を調印しておるということも聞いとりましたんでね、こりゃあ、まあ考え方によっては、やばいなァ、とにかく早う逃げんと危ないなとは思っとったけれどもですね、終戦当時の現地での混乱した空気では勝手な行動起して、もしも北海道へでも逃げるとですね、皆、水際で北海道におる軍隊にみな殺されると、殺すとこういう風におどすわけですよ。そういうことで、こりゃあ動きがとれんという様なことで、非常に私ペエペエの二等兵、星一つですし、うかつな行動は出来んけれど本心としては逃げたいなァと思ってました。という事は、その当時エトロフには、上陸用舟艇が約六十隻あるわけでしょう。それからあすこには、相当アイヌの漁場がございますからね、アイヌの漁船がいくらでもある。それ調達してですね、逃げて帰ったら一昼夜で帰れるんですわ。そんなことでですね、軍がどういう様な交渉に入るかというのを非常に注目して見てました。第一回の公表で出て来たんが、現地の協定では将校には依然として帯刀を許すと、こういう交渉しとるわけですよ。それから祝祭日には、下士官までは酒飲んでよろしいと。こりゃ何じゃとやばいなァと。そうして大きな交渉は全部関東軍司令官の山田乙三大将がやっとるから、その指示を待つと、こういう師団通達なんですね。こりゃあ危ないなァ。だんだん不安になって参りました。そうしている間に、所謂、八月の十五日の終戦から一か月後ですね。九月十五日頃に漸くやゝこしくなって来て、ソ連軍がずーと

南下して来まして、上陸し始めたと、その間、約一か月以上ありますでしょ。その間、我々何しとったかと云いますと、何の指示もないのです。とにかく越冬に備えて馬の飼料確保の為に草刈りしなさいとか、あるいは又、所謂健康に注意、その程度で何にもしない、現地ではね、傍観しとったと。この空白の時間というのは、今から考えたら勿体ないですわナ。

現地の司令官始め首脳部がですね、現地判断を下してね、まだソ連軍の占領下でないんだから、勝手に行動起こそうと云うて決断をして内地帰還の指揮とったら、ほとんど帰れてますよ。それが以上の様な始末で、全部ソ連へ持って行かれたわけです。所謂終戦から一か月後位にソ連軍が入って来て、エトロフを出るのが九月二十日頃ですから、その間、我々に何をソ連が現地で指示したかというと、山に上げた食糧、全部降ろしなさいと、全部降ろさされて、我々が引き上げするという名目で乗船の際に全部船に運ばさされました。彼等はそれを全部ソ連へ持って行って戦果とした。まあ、こういういきさつですね。見事に全部持って行かれた。九月二十日頃に、さあ、いよいよ出航という時に、その時の船はですね、私は船に関係があったもんですから、よく知ってますが、リバティ型というアメリカの戦時標準船の八千トンクラスの船でございました。それに乗せられて、これから内地へ帰すんやとこう云うんですね、私もその時八割方は帰しよるなァと思っていました。ところがいざ出航するのが丁度夕方に出航します。夕方出航してオホーツク海をずーと南下しないでですね、西へ動いてゆくわけですね、西へ。カラフトの方へ。ははァ、

これはカラフトから宗谷海峡を通って、そして小樽へでも行くのかなァ、稚内へ行くのかなァ。そうして夜の間航行ですね、ずーと。明け方になったらですね、今度はずーと大泊の方へ北向して行った。結果としては、大泊の港へ入った。そこで将校以上は全部降りなさいということで、桟橋でめし炊きをしようとその間は、出港以来ほとんど我々に食糧与えません。結果から考えたら輸送するのに一番容易な方法とったわけですね。ほとんど食糧与えない。だから我々はすきっ腹のまゝです。飯合炊さんするんだということで桟橋で飯炊きをしました。それから司令官はじめ将校は全部降りなさいという事で、その時に将校は全員刀とお金をとられて、それはいずれ返す、けれどもあずかっとくという様なことで、将校は刀なしで船へ上ってきました。そうして司令官並びに高級参謀等、本隊に所属する五、六人だけは拉致されました。これはハバロフスクへ持ってゆかれたのでしょう。

いよいよ夕方になると船が出航するわけです。三時頃に出航する。どんどん南下して稚内の所のせまい海峡を通るのが、丁度夜中になる様に計算されている。所謂目に見えん様にする。そうして大泊から出て来た時に、これは大きなマイナスだぞという事に気がつきました。なぜかというと、ソ連の軍艦がはりつきだしたのです。駆逐艦がぱっと我々の船にそって。それをずーと誘導しながら、夜中の間に稚内を通るわけです。それでもまだあきらめきれませんからね。小樽の方へ行くんかなあと思っていたら、そうではなく、朝明るくなって太陽が船の方向の舷の東に見

えるでしょ。ああ、こりゃ北上してるじゃないか、あそこに海馬島ちゅうのがあるんですよね、樺太の真岡の沖に海馬島。海流の関係で小樽へ行く時でもあそこを通って海流に乗って一挙に南下して行った方が早いんだと、こういう事を云う漁民がおったりね。そんなことで、よい方へよい方へ、我々は解釈しとるんだけども、結局は夕暮時にはですね、もう、ずーと海馬島はるかに南へ遠ざかり、そして船は一挙に北上している。夜も八時頃になりますと、月が出て来て波がなくなる。海が北へ行くほどせまくなってますでしょう、あそこのせまい所へドンドン行く、まあそんな事で、万策つきたと云うてがっかりしていると、船がとまった所がどこかというと、真岡のほぼ対岸にポルトワニという港があります。その横にソウガワニという軍港がある。これはウラジオストックよりも今、大きくて恐らくソ連の所謂軍港ですね、潜水艦の基地でもある。あそこが極東艦隊の主たる基地になってるんじゃないですか。ソウガワニという軍港の横にポルトワニというのがある。ポルトワニからアムール川へ向って四百キロ北上してカムサモリスクに達する。そこからハバロフスクへ又四百キロ。全長で約八百キロ、これがバム鉄道というやつですね。我々の上陸時ではこれが未完成のままでございました。というのは、グリンランドの方はドイツの潜水艦がものすごくあばれているもんだから、よく沈められるのでアメリカ・カナダからの援ソ物資の主要な輸送ルートとして、これが浮上してきた。急拠ポルトワニを作り、樺太の北を廻ってここに達する。尚かつ、バム鉄道を作るという事になったのだと思います。

ソ連では当時男子は兵隊にとられているから鉄道を作る要員は、ほとんどソ連の囚人女性があたったと、こういう経緯がございます。なぜ女性がという事は、所謂独ソ戦の時に特にウクライナ、ブロロシア、あの辺のヨーロッパに近い所にドイツ軍が進軍しましたね。ところがシベリアでウクライナ人に私も何回も接触した事がございます。けれども非常に反ソ的です。ロシヤ人に対して、共産党員に対して非常に批判的というかアレルギーがある。だからドイツが来た時、よう来てくれたと云うてですね、うかれてしまったんですな。女の子なんかでもドイツ軍に非常にサービスしたりですね、ダンスしたから、お前懲役十年、とにかく彼らにやさしくしたヤツは全部懲役と云うて、全部それがソ連の所謂極東地区へ労働力としてまわされました。そしてそのバム鉄道の所謂鉄道造りに従事させられた。あの辺は湿地帯にどういう事やったかというと近くの森にはエゾ松・トド松の巨木がありますが、それを切り倒して来てバーン、もう無雑作に倒してゆくわけですね、そうしておいて、そこに岩山から取り出した拳位の石を、その上にどんどこほり込み、レールを敷いてゆくというんですから、通る云うても、デコボコの俄造りのもので、これが開通と同時に大急ぎで援ソ物資の一つの主たるルートとしようとしていた。こういうふうに私、思いますね、結局、日本の捕虜はですね、その後始末をしこの鉄道を仕上げるために、約十万名が沿線に投入された。

一方、満州の方ではですね、ここに皆さんにご披露しますが〝シベリア抑留〟という本の著者、

この人は兵隊に行ったわけではないんですが、中国新聞の恩田という記者でございます。かつて原爆に関する周辺の情報を全部集めましてね、これを本にして新聞社賞をもらった事があるんです。この人が六年程前から、終戦時の満州事情とシベリアの抑留の諸問題、この部分は所謂日本の戦記の中でも完全に空白になっておりました。どこの文明国でもですね、負けても勝っても戦争に関する戦記については捕虜とり扱い状況の細部に至るまで全部資料として収集されているんです。国が主宰して整備しています。日本だけがこれがない。特にシベリアについてはほったらかしに近いわけです。ここに大きな空白があるというんで、これを全部整理して埋めていかなければイカンという事で彼が六・七年前から始めて、完成した。いろいろとシベリア関係の本が出てはおります。そういう本の資料を全部集めて、そうしてその中から今度はリサーチをしましてね、いろいろの角度でいろんな人にリサーチをして六年がかりで集めて、これを半年間にわたって、昨年、中国新聞で連載をした。それが今回単行本として、講談社から全部まとめて出版されました。この本がそれであります。これが恐らく日本の所謂捕虜関係の我々が知りたいと思う様な今まで知られておらん部分、全部ほとんど、埋めてくれているという形になると思います。昨年これが新聞社賞を取りましてね、私の方にも事前に電話をしてきまして、実はこういう目的でやるから、あんたの本が一番客観的に見てる本だと思うからそのまま引用させてくれ云うて約十四頁、私の本〝シベリア抑留〟の文章から全部そのまゝ載せておりますわ。非常によく我々の知

らん所を埋めてくれとる。例えばですね、この本にも書いとりますが、南北朝鮮のあすこの三十八度線まで、ソ連が参戦と同時に一挙に南下して、あそこの鉄道を寸断したでしょう。満州から帰ってこようとした居留民が、あそこで全部ストップをくいまして、逆流させられたんですね、そうして相当な被害が出た。なぜ三十八度線までソ連が出たかという事、これはアメリカとの所謂ヤルタに於ける協定があったらしいんですがね、終戦の昭和二十年の五月に関東軍が作戦転換をしている。

ご承知の様に山下奉文とか、そういう関東軍の主力が皆、南方へシフトをしましたね。満州が空になってきたから、とてもじゃないが日本軍からの積極作戦がとれないと、だからソ連が入って来た時にのみ守れる体制にかえようと、それには奉天というのは、あまりに前線に過ぎるから、もっと南下しようというふうなことでですね、関東軍司令部を通化まで南下することと、それから北緯三十八度線以北を朝鮮方面軍司令官の所管から関東軍の幕下に入れているんです。それを決定してるんです。それはそのまゝソ連につゝぬけになっている。だからアメリカとヤルタで交渉する時にですね、あそこまで我々の占領地に認めろという事に、どうもなったふしがあるという事ですね。そういう事がちゃんと書かれています。それかは昭和、終戦の年の八月六日にモスクワの佐藤大使がですね、クレムリンへ行って、近衛さんをモスクワへ派遣してもいいから、何とかアメリカとの間のとりなしをしてほしいと申し込みをしています。大使は六日七日八日と待

たされて、八日の晩にはすでにモロトフが所謂ヤルタの軍事協議での最終的なつめから帰っとるんですよね、スターリンも行っとったらしい。そうして九日の夕方、やっと佐藤大使は呼び出されて喜んでかけつけると、結局ですね、お前の要請だけれども、かくかくしかじかでソ連は連合軍について、そうして参戦する事になった。十日の午前零時を期して攻めるから、その前の九日の夕方ですよ、云うて一方的に通告されるわけです。かまわないからモスクワ大使館は、日本の本国政府へ打電してよろしいと云うてつき返されたわけです。大使館へ帰って日本へ打電しようとするんだけど、全部線が切られておった。まあこういう事ですな、始末は。第一報を入れたのは、むしろ同盟なんですよね。同盟が入れた。そういう様な非常に一方的なソ連の卑劣なやり方というものが、そこにも出ています。私もね正直云うて今、考えるんじゃないんですよ、千島エトロフで当時考えたものです。

ソ連へ仲裁を申し入れた事を耳にしまして、何ちゅうお人好しだろう、普通常識では考えられないじゃないかと私はそう思った。それ程まあ日本っていうのは甘かったちゅうか、外交音痴だと思うんですよ。いずれにしましても私がソ連に入ってから私も学生時代の風潮として、いろいろとそういう進歩的と称するですね、いろいろな本もちょっとかじったり、興味ありましたからね、こりゃあもう泣いとっても仕様ないわ。何かシベリアにいる間に勉強せにゃあ、丁度いいチャンスやという様な欲もございましたので、あくる年の春ですね。ハバロフスクのソ連側から各

カローナに命令が来ましてね、壁新聞を書けと。各兵隊に書かせろという各捕虜収容所の我々の隊長に向かって指令が出た。ソ連がそう云うて来ておるから、にぎりつぶすわけにはいかないから書こうや、書くけどおかしな事書いたらアカンで、という様なことから始まったんですよ。いずれにしましても、そういう事から始まって私が中隊から一人選ばれましてね、大隊で、四・五人選ばれたですかな。私がその書いた時の一番の焦点は何か云うとですね、皆がこういう様な逆境にあるのだから、出来るだけ早く将校と兵隊との格差を食事面でなくした方が望ましいし、特に食べものでその平等を実現すべきだ。というのが私の主張でした。というのはですね、大隊長はですね、昔の慣習と惰性がございましてね、日本軍の持ち運んだ米というのは、ソ連側が自分の食糧としていて日本兵にはコーリャンを支給する。しかし病人用として少しの米が、各病院にのみ支給される。それを横流しして大隊長が食うわけです。大隊長だけが、そして又、大隊長の当番兵が作業からへとへとになって帰って来た我々の見える所でですね、もみを取ってるわけです。ピンセットでこうやって、そりゃあ誰が考えたってよくない風景ですわね。環境的に、こりゃあ、いかんと、こんな事するなという様なこと、いろいろ書いたもんでございます。それからいよいよ民主運動の広がりというものの中へ、私も身をあずけてカローナ内の民主運動のリーダーになります。私のリーダーとなった動機は、云いわけでも何でもございません。一つには兵士の環境改善につくす事。もう一つの動機は、私は勉強するのに、やはりソ連に近づく事を考えま

した。ソ連の政治部員と直通になれますからね。そういう事で、あの体制の良さ、悪さを充分勉強してやろうという欲がございました。そういう事で約一年間、その方の専従をやることになります。

入ソした年の最初の冬が大変でした。環境が悪いという事と、それからもう一つは、環境変化への対応の気持の整理が出来てない。非常にショックを受けた状態の時という事でですね。この最初の冬の間に我々の大隊は八百五十人おりましたけれども、それが一つのカローナに入っていましたが、その内で約百五十人程が死んで行きました。一番の原因は、栄養失調。その次が風邪による急性肺炎ですかね、それでしかも非常に極度に栄養が失調しとりますからね、わめいて死なないんですよ。朝起きたら、上や隣の人が死んでおったという様な状態でした。それが身近に私の上にもおった。林上等兵、〝おい〟と起こしたら、もう死んでいた。つめたくなってる。それがですね、苦しむ声を発したとか、何にもなしに、すーと眠るが如く死んでおるんですな。そういう事で大体ですね、ソ連に於ていろいろ場所によって違ったであろうけれどもですね、最初の越年、その冬を越した翌年の五・六月頃になってはじめて捕虜名簿の作成が始まった。だからこの間に期間があるわけですね。所謂終戦の年の十月頃、ソ連へ一挙に運ばれて翌年の春を過ぎて居場所が落ちつくまでの間、各作業部署を転々とさせられた。あの厳寒の冬を通してですよ。その間にソ連がつかんでいたのは、名簿はおろか労働員数だけなのです。そうしてその間に、あ

っちの森林へ、こっちの炭鉱へ、この位の労働力をよこせ云うて、日本兵をふりまわしよった。

翌年の六月頃にはじめて名簿が作られた。この間の空白の間に死んだ者は捕虜名簿に載ってない。これがよく復員局なんかで、ソ連と照し合せて数字が合わないという一つの大きな原因ではなかろうか、と思ってます。ソ連で死んだのが推定十万以上、しかも、そのうちで少なくとも最低五万人、この人達が最初の一冬で死んだ、これが捕虜名簿から消えた不幸な犠牲者である。こう捉えていいんじゃないでしょうか。そういう非常にひどい状況でございました。私の方は、ご承知の様にあまり場所を動かされずに、そして港周辺にいまして、専らそのバム鉄道の鉄道並びにその駅舎、これを建てる。大工部隊なんていうのは、割方、器用な兵が集められましてね。これは駅舎を建てるわけです。この駅舎は、ほとんどイルクーツクの方の木材工場から規格化された建材パネルを持って来て、それをはめ込んでですね、組み立てたらよいという。私、それ見ましてね、こりゃあおもしろいなと、日本へ帰ったら一つこれを事業にしたら面白いなと思ったものです。その事を帰った当時は考えてました。女房の家業を継ぐ破目になってこれは実現しませんでしたが……。規格的な組立てハウスですね、ちょうど大和ハウスの石橋社長がやはり農学校出て、中尉か何かで満州におったんです。彼は関東軍で森林関係やっとったわけです。彼が人に書かしたんですけれども、〝シベリア抑留〟という本を出しました。その時に〝財界〟の編集長やっておった山口比呂志君が〝石橋さんが頼んでおるから、お前、ちょっと読後感想文書け〟っ

て云いますから、そのヒントをちょっと云うたんです。石橋さんの今の商売のヒントもシベリアにあったのではなかろうかと云ってね。彼、私に電話をかけてきて〝ずぼしや〟と云うてました。だからやっぱりあゝいう逆境の時でも一つのチャンスとしてですね、そういう目で見て、何かプラスにしようという心掛けの人は、やっぱりそれを仕事にするとかね、事業にするとか、成功してますね。たゞ被害者意識だけで呆然としておったという者との差がそこにあるんではなかろうかと思います。それからもう一つは、非常に私はよく仮病使ってソ連側をごまかしました。彼等と真面目につきあったらたまらん、とにかく食べものはないしひどいから。私は昔、肺病をやったんだという事をいいわけにしましてね、体温計を全部、口の中へ入れまして、ふって微熱があると、それで大部得しましたよ。ソ連の連中はね、体温が病気判定の最大要素で、次はお尻をつまみましてね、栄養失調の判定をするわけです。私のお尻はさほどやわらかくならんのですが、〝熱がお前はいつでもあるなァ〟と、だから病院へ入れという事で、きびしさを逃げてですね、病院で一週間おると割方元気を取戻す。こういう事を繰り返しておりました。

それから私がシベリアの民主運動の専従になるのはですね、ちょうど明くる年の秋から以降ですね。二十一年から二十二年の暮まで約一年間は、専従になります。その時にいろいろと体験した事が、ここに〝シベリアの民主運動〟と云うて、私が書いた抑留記の中の後半の部分に、民主運動の体験記を書いておるわけですが、私の調べたところでは、民主運動をリードしておった経

験者でそういう様な自分の自叙伝というか、体験記を本に書いてる人はだれもおりません。私だけです。恩田君に聞いてもいないと云うておりました。だから私の本は研究家の間で貴重な資料となっておるそうです。という事は、どういう事かと云うと、大概の者が民主運動のリーダーという一つのポストについたとたんに新たな民主将校みたいなものになり下って、ソ連の権力をバックに横着をきわめた。その事によって、嘘を書いたら、やられますからね、だれかが見てるから。書けないという様なことがあると思うんです。私はですね、相当厳しく自分を律しました。ソ連ともケンカもした。いろんな形でですね、我々と接したソ連の役人には、ご承知の様に思想関係担当とそれからもう一つは作業担当があります。我々日本軍の事については、はじめからソ連側はよう調べてましてね。第二国民兵部隊だという事を。だから最初からクリー扱いをされました。彼等はその事を公然と云ってもいました。特に千島列島に張りついたのはですね、玉砕要員で弱兵だから。お前らは労働力として使うのだと最初から設定しておった。それからもう一つはですね、関東軍の中でもですね、所謂にわか関東軍とそれから、本当の精鋭が一部残っているのをよく見別けて調べておりましてね、その一部精鋭については、日本人による民主運動の対象から外しております。ハバロフスクに本部があって、日本人にやらすわけですが、これの介入を許さなかった。相当長い間許さなかった、元の軍隊の編成のまゝ、ぴしっと残しているんですよ。その精鋭部隊の連中には非常によい食糧を与えてます。所謂健康が低下しない様に。これはどう

いう事かと云うたらですね、ご承知の様に終戦と同時にアメリカとの間がややこしくなりますわな。現に我々が作業してた港のワニノ湾でですね、ちょうど昭和二十年が過ぎて二十一年の一月アメリカの潜水艦が拿捕されましてね。ワニノ港に入って来た。そして霧モヤにまぎれて浮上しよった、迂闊に。それを見つけられ大砲でやられましてね。そのまゝ故障して沈下出来なくなった。それを見つけたのは港で夜間作業中の一囚人です。すぐに、その日にモスクワ指令で十年の刑を免除されましてね、殊勲甲で。すぐモスクワの方へ帰された。そんな話はもうすぐパーとちらばりますからね、ソ連でも。あいつはうまい事やりよった云うて、羨ましがられていました。

非常に情勢がやゝこしくなって来た。緊張して来た。だから一部精鋭関東軍は万一、米軍上陸の際はその矢タテ要員として、温存されていたのだと私は観察していました。二十一年四月頃になりますとね、どんどん兵隊が我々の仕上げ作業中であるバムの鉄道を頻繁に通ってワニノ港に向うわけです。どこへ行くのやと聞いてるとですね、千島へ出発するのやと。千島列島の中央部にはマツワ島という島がございますでしょう、いわゆるクナシリ・エトロフ・ウルップそれからマツワですかな、マツワ島というちょっとだんご状の島です。これ火山島ですよ。その溶岩がうまく台地を作ってその様になっております。そのマツワ島には日本軍の飛行場がございました。そのマツワ島に六千名のソ連軍が増強された。この島について早くから北海道大学の先生が昭和二十一年頃には火山爆発するかも知れんと予言しておるという事はエトロフ島におる時聞いてお

りました。正に予言通り、終戦になった明くる年の六月に爆発したそうです。その島にいた六千名のソ連兵が全部死んだという事を、ソ連側が云ってました。春の中に急いで増強されたソ連兵の相等数がこの被害にあった事になります。そういうアメリカとの緊張の度合が高まるにつれて、夜間演習をするとか、私達の周囲のソ連兵の動きも激しくなってきました。どうしたんだと聞くと、「いや、アメリカとおかしくなってきたんだ」という事でした。我々も一年程かけて、鉄道や道路の整備を完了しますとね、次に何をやらされたかというとですね、今考えてみると弾薬庫の建築でした。私が民主運動のリーダーをしていたカローナは総勢二千二百名、これを中核として約八千名が集結されたのが二十二年の三月末。そしてですね、そこで一大突貫作業が始まる。作業の内容はと云いますと約十六万坪の原生林を四月から切り始めましてね、そしてその材木を使って弾薬倉庫らしき建物を作るわけです。それを十六棟、五か月間で完成するという突貫工事でした。即ち一つの建物の大きさは縦が七十五米、横が三十米位のもので、ものすごく大きい建物を十六棟も建てるわけです。そうして各棟へ引込線をひき鉄道を引くわけです。それが完成をみるのが、お盆の頃でございましたでしょうか、暑い時で、貫通したら今日で作業終りと申し渡され、何とその日にですよ、ウワーッと弾薬を運んで来た。まあ、そういう事で、この仕事の完了を境にして、おしつけられる作業ものんびりした緩慢なものになりました。シベリアのみならずソ連の各地に散らされた日本兵の作業状況も入ソ以来、約二か年余りが山場で苦労させられ、

その後は気楽なものになって行ったのではないかと思います。

しかしそれからが大変だったんです。今度は、民主運動に大きな変化が起りはじめます。最初は捕虜の待遇改善という様な事にばかり集中していた民主運動がね、いよいよ本番の政治闘争をやるのだと云うて、非常に厳しい線が出てくる、それが袴田方式。日共の元副委員長で脱落した袴田の弟がね、その息子さんが大学の先生をやってて、ソ連通として、よくテレビに出てますわな、あれのおやじさん、モスクワに今でもおるはずです。それが当時、ハバロフスク中心にコワレンコ中佐指導の下で、展開された日本兵民主化運動の実践活動派の頂点でした。彼がチタ地区責任者をしていて問題提起をした。もう一度、民主運動を根底から見直そうやないかという様なこと云いましてね、民主運動に最初にかかわって来たのは、まあ云うなればインテリですわな、大体東大出た者、あるいは早稲田出た者という様にほとんど全部がインテリ出身ですよねェ。だから運動がプチブル化してしまっている。これを見直して真のプロレタリヤ運動に持って行くべきだと。そのためには各分所毎にプチブルを叩け、将校をもう一度叩き直せと云うわけです。叩かれる方はたまったもんじゃないし各分所内は騒然としてきました。その中で私の分所では非常にスムーズにいった方です。私は教育のない人にわかりやすく説明する事に非常に工夫をして、カローナ内に夜間民主学校を作ってました。私はその校長です。私のカローナの所属する上部機関は第一地区と云って本部はソーガワニの近くにあり、これはカムサモリスクの大地区内の第一

地区、そこの地区の本部長というのが、一高出た美勢君という男です。彼の上に第一地区の民主運動総指揮者として添原というのがおりました。彼は何でも日本で元刑務所に守衛として勤めていたらしい。ハバロフスクのソ連側から第一地区の民主運動を最初にまかされた男で、無知横暴な男でしたが、彼は失脚して行きます。彼の下で美勢君は秘書長兼宣伝啓蒙本部長を勤めており、地区本部の中央民主学校校長も兼ねていました。

聞いてみると十七年の東大出でね、一高やと云うわけです。ところが後で彼と対立する事になる。私は教育の低い兵隊にやさしく理解出来る様にこれ努めましたから、これが地区内の評判になりました。本部講習に行っても難かしい言葉ばかり聞かされてちんぷんかんぷん、さっぱりわからん云うわけでね、評判が悪く、私の分所からも本部講習希望者が出なくなりました。美勢君がそれを非常に気にしておった様でね。本部連絡に行く若い子に「お前の所は河野がおるから民主運動が進展せん」と云うてあげくにこの連中をけしかけて、あれをおろせ、おろせとやるわけ。ところがその連中が帰って来て怒って云うには「美勢がこう云うとるけど、我々はあんたの方がずーとリーダーとして、よいと思うから、本部と一戦交えましょう」と云うてきません。「馬鹿な事を云うな、こんなとこでけんかをしたら、上部機関が勝つに決まっとる。やめとけ、犠牲が出るだけじゃ」と云うて止めるのに苦労しました。とんだところでの三高一高戦でした。

そんなすったもんだがありまして、私は自らリーダーを降りる事に決めました。そして私の後

継者に日頃から目をつけていた立派な男、佐藤君をすえました。彼は日本で東京都市交通労組の幹部で、浅沼稲次郎氏等と闘争歴があり、五回入獄経験を持つすじ金入りでしっかりした男でした。分所内夜間民主学校の方は依然として私が引受ける事を条件に彼はリーダーを引受けてくれました。ところが彼が本部へ行って発言しだすと、美勢君も歯がたゝんのですよ。お前らのやっとる事は歯が浮いとる云うてね、やるもんだからね。今度も又本部の連中はおもしろくない。「お前は労働貴族だ」と難くせをつけられて、中央から落とされる。その次が、東京の日本印刷の印刷工出身の山口君、これもしっかりした若い子でした。この山口君を委員長にして、私はもう蔭にかくれてだんだん運動から遠ざかりました。いろいろございましたが、その間にやはり、何ですな、ずーとわかって来た事は日本人のハバロフスクを中心にした民主運動っていうものが、日本新聞を発行してやってはおりましたが、それを全部コントロールしておったのはやっぱりソ連側だったのです。ハバロフスクに、ソ連側のコントロールタワーがありまして、その責任者は皆さんの頭にもあると思いますがコワレンコ中佐という男です。コワレンコ、彼が戦後の所謂極東政策、対日政策をほとんど自分がやっておるんだと自負する男です。まあ聞いたところによると、アメリカの国務省なんかへ行ってね、シベリアの民主運動を通して日本人の体質を私は皆知っている。彼等は強く出たら一辺にペチャンコになる様なやつだから、強う出なあかんのや。アメリカとソ連とで、うまく歩調合わせてコントロールする気になったらいくらでも出来ますよ、

と云って傲慢な啖呵をきる男やそうです。そのコワレンコが、ずーとその後も極東政策を実質的にはリードしておるらしい。そういう様な構図もわかってきましたし、当時すでに「これは深入り出来んな」と思う様になっていました。だんだん運動が偏向して行く。シベリアの二年間で、将校・兵の階級も実質上消えてしまい戦う目的がなくなったのに、それでも尚闘争目的を強いて作ろうとする無理が出て来たわけですね。民主化した将校も皆、引っぱり出されて、被害ばかり受けるという様な無理が起りましてね。これじゃ運動は自己崩壊してゆくなと思ってましたら、結局その通りになってますわな。一方でその頃には引揚げが始まる。私は自分の引きあげを自分で一年おくらせました。なぜかと云うと、やはりそういう民主運動っていうか、そういうものの正しいリード、補虜の待遇改善そういうものが、かゝってますからね。そういう大切な仕事やっとると、これ、又一つの事業でね、それなりにあゝいう様なソ連という逆境にあってもね、使命感というか、あるいは仕事としても、やりがいがあるというか、これは今、これをほっといて帰れんわいと思って、帰る機会がございましたが一年ずらしました。

帰国者名簿作成の最高責任は、当時リーダーが握らされていましたので責任は重大で、私は最も公平なルールを決めてこれを実行しました。帰国者資格の三条件として、本人がいない事で一番困っているであろうと考えられる家庭環境がまず第一条件（これは小隊長が点数責任者）、それからその次にはですね、やっぱり日常作業に熱心であった事（分隊長が点数責任者）、最後に

は民主グループからそのグループで皆アクティブがおりますから、それに点数つけさせて、この三者合計点で平均点を取って決めてゆくと、こういう事を常に実行しました。二十二年の秋、私の分所が大工事達成の功績で分所半数以上の大集団で帰国と決定し、私が長になって帰る事になるんですが、これはアムル川の予定より早い凍結と次の様な事情が重なって翌年まわしになりました。

ご承知の様に昭和二十二年の春頃から本格的な引きあげが始まっており、約百万近くおりますからな、ソ連全土に散って、皆、早う帰りたいわけです。そうするとですね、その船出する所は唯一ナホトカ港でしょう。ナホトカへ皆、あっちこっちから集まって来るでしょう。ところが鉄道輸送力に限界があるもんですからですね、船が来るのとですね、うまく合わんと、先に行っとるのが、ふんづまりになるから、逆流させられて後まわしにされるんですよ。それによってですね、あの辺に一年間程も止めおかれ、折角ナホトカまで来といて、もう一度、裏へまわされた場合とか、ソ連から見たら員数帰すんやから同じことやと云うんですが、当人達にしてみたら、大きな問題で。大変なことなんで、いろいろございました。

特に栄養的に困っているというか、ある地区はまあまあよいが、ある地区は困ってると早う帰った者程、困ってる状態の時に帰されてますからね、奥地からナホトカまで来てね、久しぶりで海を見てコンブを生で食う者がいる。その為に中毒おこしてナホトカで死んだりね、そういう犠

牲が出たり、生のまゝゆがいてね、ヨードでやられた、それからもう一つは、我々シベリアでですね、野草がありますわな、北海道の人は非常によく知っている。私なんかの兵隊の仲間はほとんど北海道ですからね。カラフト、北海道人はいろいろとそういうキノコが出るわけなので、キノコとか草がそれをよく知ってるんですね。ところが京都の人、知らんもんだから、綾部の男で由良君と云う兵長だけど、そのおいしそうに色も美味しそうに見える野菜が毒草でね。もう一日のうちに、もだえ死んだ人がおりましたりね。いろいろそういう様な被害も出ましたしね。そんなこともありましたが、私、非常に大きな体験したと思いますのはオッペカローナ云うて、病院へ入って休養するでしょう。するとオペ専門のカローナという病院と称する休養所があるんですよ。そこで飯盒の掛子におかゆを一杯しかくれないんですよ。本当にうすい、それではとても足らんでしょう。そこでですね、炊事当番はと見ると皆あいつらはたらふく食ってふとっとるとかね、そんな事ばっかり議論して怒って不満をぶちまける。そんな事ばっかり云うとる人程、やせて行くんですね。一冬に一番やせた人は二十キロやせた。ここに医者の先生おられるかもわかりませんけど、あゝいう時におこったり非常に興奮したりする事が続くとですね、健康の為によくないんですね。それで私は出来るだけそういう渦中に入らん様に心がけていました。効果がありましたよ、私はね二キロよりやせてない。一冬の間に、その少食の中で一人ベッドに横になって、人に聞えない様な小声で鼻歌ばっかり歌っていました。正直云うて、自分の中にこもってペース

を保っていた。出来るだけそういう雑音に耳貸さん様にしてましたから、それがどうもやっぱり健康の為にはよかった様な気がします。消耗が少なかったのではないでしょうか。そういう感じが致しましたね。いずれにしましても、歯は全部この通り入れ歯ですが、ホーロー質がみんなおかしくなりまして、痛みなしにボコボコとれて行きまして、栄養失調の極で、当時一尺が跳べないんですよ、まだ三十歳でしたが一尺が跳べなかった。帰った時には、まあそこまで栄養失調がひどかったんですが、それでも何とかもって、三年が経った。

ちょうど昭和二十三年の八月二十三日、これも又、偶然なんですね。エトロフに上がったのが八月二十三日、シベリアに上陸したのが九月二十三日、二度あることは三度あるかもわからないと思いましたね。二十三年の十六日頃に、ワニノの基地を発つわけ。いざ帰国と云う時に「河野はダラカンである。あいつは帰ったって絶対に民主運動しないから、あいつは帰してはならない」と云うて、第一地区の本部からわたしの帰国をとめる為のいろいろな工作がなされた。ソ連政治部への陳情やら、ハバロフスク本部への陳情やら。民主運動の地区や本部の日本人がです。ところがソ連側の通訳がいましてね、日本語のよくわかる、横浜の国立出た男ですよ、留学して。この男が私のところへ来てその実情を全て教えてくれました。「河野、お前を帰さんと云うとるぞ、民主グループの日本人が当局へも陳情しとるぞ。だけど、わしは河野を帰せ云うて当局へ陳情しといたから恐らく帰れるよ」と云ってくれました。その通りになった。日本人が帰さん様に

して、ソ連の方がわしを帰した。それだけ彼は私を信頼していた。

それは河野が日本に帰って民主運動活動家になるとまでは信じ難いが、シベリアに於ける活動に関する限りは、彼等が秘かに調べあげた私の日常実績に照して立派であったとの評価だと思います。別れぎわに通訳は私にモスクワの大学に留学せんかと云った。内心私はぞっとした。「いや今さら勉強する必要なんかないよ。一日も早く帰って私なりの実践活動をするつもりだ」と彼に云うと「あそうか、やはり帰りたいだろうな。それでは帰りなさい。」という事で帰したんですが、実はですね、ソ連のあゝいう政治的なシステムというか、あれは皆同じやと思いますがね、正直云うて私がカローナでリーダーの仕事している時に、私に日本人のスパイが七人つけられてましたよ。このスパイ候補者として目をつけられるのは、やはり労働者、農民の出身でした。インテリはダメ。それにソ連が選んで、オイ、お前は今日から地下へもぐれと、そして民主グループのリーダーの挙動を全部監視しとれというわけです。そして一週間に必ず一回巡回してくるんです。これが先程の通訳なのです。そして何か変化あったら報告する。「何もありません」「何もない筈はないだろう。お前はかばっておるだろう」といじめられる。何か云わんならん様にしとる。リーダーがいつどういう所で、どういう発言したか、全部記録に残しておく。そういう役を我々はさせられてる云うて、皆、僕の所に泣きに来ました。実は困ってますと。あゝ、そうかと云うて、お前も知らん顔しとれよと。私、それ等の人を分所から散らしてやりました。スパイで

あることを知らんふりして、散らすというのは、どういう意味かと云うと、例えば要員何名をこっちの炭鉱の方、こっちのカローナの方へ移動せよという要請がソ連を通して来るわけですよ、その移動人員の中へ入れてやるわけです。パッと入れて、我が分所からほかすわけです。分所毎に捕虜名簿とか、そういう秘密命令系統が決められるわけです。所管が違うから、所管の外へ出してやる。もう一つの方法はですね、今度は、「お前民主運動やっとるけど、お前は今日からスパイの命を受けたから民主グループをやめて、地下へもぐれと云われる」こういう要請を受ける時があるんです。そういう場合には、そいつを一層重要視して民主グループの重要な役にすえる事。そしてもう逃げられん様にする場合があります。この両方ありましてね。この二方法をうまく適度に使いわけたわけです。

まあ、そういうふうなことで、結局彼らのやり方はですね、民主活動に最後まで使うて、途中で状況の変化が出て来て、脱落とか、いろいろ活動家の評判が悪過ぎると。最後の最後まで使っといて、失脚せしめる時、それを正当づける材料を一挙に出しますね。お前はかつて何時、こういう所でこういう事を云ったり行動した事がある。全部出す。その為の証拠を日頃から積んどくわけです。それを最後の最後の時に出すわけです、全部。だからお前は駄目なのだ、云うてそこで決をとるわけです。それまでの間はなかなかですね。やはり一たん活動家に登場した者は、これを出来るだけ使う様にしますね。そしてどうしてもやっぱり日本人との関係で、日本人の方か

ら見てももうこれが指導力のない男としてラク印をおされたというのをみとどけてから踏ん切りつけて、その時、落す為にボーンとやるわけです。それもソ連の方が充分頃合いを見ておって、こうだというふうにやりおる。そういう非常に悪どい方法、そういうものが、あゝいう様な捕虜との間のわずかなシステムの中でも同じ様に生かされています。方法論としてつらぬかれているんだなと感じました。その様なわけで僕はものすごく慎重に警戒したわけです。だから誰でも気楽な雰囲気の時に本音を云うわね、それが皆ソ連の耳に入っておって、そういうものが必ず記録されている。そういう監視の網の中をくぐって来たという事ですね。

それからご承知の様に、私のリーダーとしての立場で接触するソ連側は二側面があって、一方は政治部員であり、一方は労働担当側です。私がカローナの実質的な長ですから、前者は共産党員であり、後者は捕虜収容所長です。後者の場合はソ連の独ソ戦の捕虜になった将校出身者が多い。捕虜になった人達が全部、中佐が例えば降格されて大尉になるとかね、大佐が少佐に、大体二階級降格ですな。お前達はドイツの捕虜になった経験者だからこれから日本人捕虜を面倒みろと、こうなるわけです。ピストル、日本で云うたら軍刀、そういうものは持たしてもらえない。だから収容所警備隊長の少尉にも頭が上らない。彼らは非常に屈折した気持で日本人をいじめる場合と、日本人に同情して、同じ身だから非常に親切にやる、この二つがありましたね。いずれにしても、そういうものと今度は労働の方はですね、やっぱり内務省の管轄、そういう形でハバ

ロフスクが極東局でしょう。そこの長官は高い地位にあってですね、それの命令下で動く第一地区労働担当者にクレメンコと云うのが出て来まして、二十三年の春からの大弾薬倉庫群づくりの作業指揮者となりました。彼は私が非常にけんかした相手ですけれど、これはなかなか立派なもんでね。内務人民委員会次官までした人だそうです。それで冗談に「あんたは、松岡知ってるか。」「よく知ってる、あの頃クレムリンにおった。」「なんであんた懲役になったんだ」わしの刑は十年や、というわけですよ。どうしたのと云うたら、独ソ戦の開始直前の重要会議で鉄道輸送力について、非常に消極的な自信の持てないそういう様な発言をした。そのことでですね、わしは十年になった。えらいこっちゃなあ云うて、ひどい刑にされてどうですか、と。この制度では仕方ないよと、その人の息子さんは二人とも陸軍大尉と海軍大尉で、なかなか立派な人なんですがねえ。彼の云うのには、ヒットラーもえらいし、スターリンもえらいよと云って、割方ざっくばらんな男でね。とにかく何でもスターリンというふうな事でですね。やっぱり古い人ですし、余り愚痴をこぼさない。そういう感じを持っていた。そのかわり作業については、なかなかの権限を持っていてね。よくやる人でした。それが労働強化で日本人をいじめるから、私がはむかう。そうするとお前を懲役に入れてやると云うてやるんだけど、その都度私は政治部員を使って彼をけんせいしバランスをキープする。「こんな事許しておったら日本人は皆民主化はおろか反ソ的になりポンコツになるよ」と云うて政治部員に訴える。そりゃそうやなあと、その時は党の力で

とまるわけですよ。そういうやりとりがいろいろございました。

ソ連のそういう様ないろいろな場所、場所によって、日本人の受けた体験は違うと思いますが、私の見るところソ連の制度そのものの一番悪い面というのはね、やっぱり自由がないこと。硬直した官僚制度で皆上向き指向で下程権力をかさにいばりよる。これが一番の欠点ですね。日本の軍隊もそうでした。我々がカローナの責任者をやっとってもそれが出ました。例えば収容寮の内務班というか、そういう寮長なんかにするのは、大体曹長・軍曹の経験者なんです。これが皆悪い事をしよる。兵隊の作業に出ている間にね、兵隊の大切な食い残しのパンをね、帰って来てから楽しんで食おうと思って残しとくと、皆枕さがしをして盗むわけです。そういう事するのが、みんな昔の内務班長。いわゆる下士官というんですか、あれ。軍曹とか軍隊で非常に楽をした連中、こういうのが一番たちが悪い。ソ連でも下っぱの日本のそういう立場と同じのが一番悪いことして、日本人のカローナへ来てね、食糧を横流ししてよこせとかね、そういう事を重ねてやる。私はよく、お前の党員番号見せろよ。スターリンに云うたると云うと、びっくりこいてね、ウワー云うて、もうしません、云わんといて下さい云うて、その程度のお粗末さでした。だけどもそういうのが、所謂貨車の機関長とかね、住民との接点におるわけです。中央の政治部員なんかの若い将校のまじめなエリート、こいつはいいなと思うのがいましたがね、そういうのは、なかなかバランス感覚持ってゝね、悪いものは悪いと云うて、あえてソ連側でも処断するというふうな

事がありまして、そういう点ではなかなか日本でもしない様な厳しい所もあって、ええなあというのがありましたが、総じてよくない。たまたま私が日本に帰って来た時、いわゆる私の同僚で名前はあえていいませんが、やっぱり日本共産党の相当中枢部におった人がおりましてね、早速とんで来て、河野、お前のシベリアでの活動状況は全部知っとると、共産党へ入れや、云うて誘いを受けましたが、「おれ、入らねえよと、君はソ連知らんけど、わしらは三年間単なる受身じゃなく積極的に中へ入って、よい所も若干は知ったけども、悪い所をあまりにも知り過ぎている、ありゃあ、あかんわ。おれは党員にはならんよと。君は君で信念あるんやろから頑張り給え」という事で断わりました。

そんな事で三年おったという事は、苦労もありましたけども、その後の僕の人生にとってはですね、いろいろ、とことんまでの苦労と、そういう思想的なものをも含めた、一般には知らない人が大多数なのにあそこは知らんと云うのでなく、相当知り得たという事がね、非常に自分の人生にもある自信となり、ある強みになったんやないかというふうに、私は今では感謝はせんけど、一つの運命ですけど、まあよかったなあと思っております。大体こんなところで、何かご質問があったらと思いますが、つっ走った話になりました。ご清聴有難うございました。

（ムーンバット株式会社社長
関西経済連合会常任理事）